

## クリエイティブ経済を突き動かす「アートの力」とは

私はずっと野球少年でしたので、アートとはあまり関係のない世界で生きてきました。いま何かのご縁で美術番組に出演していますが、これも視聴率は低空飛行。そのような人間ですので、今日はシンポジウムの序論的な話をします。

今回は「クリエイティブな経済」というテーマですが、私はこれがよく分かります。というのは、韓国の故キム・デジュン元大統領と話した時、彼が獄中でずっと読んでいたのは情報化社会、特にアンルビン・トフラーなどだったというんですね。大量生産・大量消費の社会はどうやら終わったのではないか。韓国のように日本より遅れている社会がキャッチアップしていくためには、インフラ、つまり私の言葉で言うとストックで勝負することはできないのではないか。むしろこれから、ある種のフロー経済の中で、文化あるいはアートにかかわって考えると、文芸あるいはアートにかかわってくと、コンテナ産業というものを育成することに

レクチャー



## 感動する力 —私を変えた名画

東京大学大学院情報学環教授

姜 尚 中

よって日本にキャッチアップできるのではないか。そういうことを考えたとき、おっしゃっていました。大統領になってからは映画産業を非常に強く押し出していきましたし、ご自身もかなりメカに詳しい方で、文化政策も積極的に行いました。

日本という国は戦後、ある種のストックの面では最先端を行っていたのでしようけれど、それがクリエイティブな経済をつくり出していく上では、「成功」が「蹉跌」になってしまった。日本は今、そのスクラップアンドビルドを一生懸命やろうとしているのではないかと思うんですね。そういう中でクリエイティブ経済をプロジェクトとして考えようという今回の企画に、私は非常にタイムリーな意図を感じました。ただ、私が今日お話しすることがそこにどれだけリンクするかは分かりません。私はアートというものが自立していることによって、むしろクリエイティブな経済というものを突き動かしていく大きな力になるのではないかというところで、アートの力、感動する力などという、ちょっと陳腐なタイトルにさ

せていただきました。

## 自己の存在を強烈に問われた デューラーの自画像との出会い

私が今日お話しするのは、どちらかというと視覚芸術、とりわけ絵画です。近代社会は視覚中心主義であるということが弊害として言われますが、私が番組で取り上げた中で非常に考えさせられたことがあります。犬塚勉（1949—1988）という、無名のうちに非常に若くして亡くなられた画家がいます。山や岩、草花、あるいは空の青さというものを、本当に精密に描いていく。それをずっと見ていますと、視覚を通じて匂いが自分の中に立ちこめてくるんですね。草花の匂い分かる。たぶんそこには小鳥が鳴いていたり、葉と葉が擦れ合うような音があったり。つまり、五感がいろんな形で活性化していく。そういう不思議な体験も味わいました。

かわってくるのです。私があの番組を引き受けていいと思ったのは、これは個人的な歴史を通じて話した方が分かりやすいと思いますが、留学時代の体験にありました。1979年、私は旧西ドイツにいました。その年はアフガニスタンにソビエトが侵攻し、中国がベトナムに侵攻し、テヘランではイラン革命が起きました。イギリスではマーガレット・サッチャーという人が出てきた、大転換期でした。私自身は、留学したのはいいが何をしたらいいのか分からない。今後どうなるかもまったく分からず、毎日ドイツのどんよりとした雲と同じような、グリーミーな状態でした。

その時に、ギリシャ人の移民労働者の子どもとしてやって来たインマヌエル・スタフロラキスというクレタ島出身の医学生に誘われて、初めてミュンヘンに行きました。冬でした。そこに「アルテ・ピナコテーク」という有名な美術館がありました。寒くて暗く、それほど大きな部屋ではありませんでしたが、小さな灯りの元で私は、縦64センチくらい、横は40数センチの絵に出会いました。私は生涯で初めて未知との遭遇とでもいうような、アートの大きな力に出会いました。今まで知らなかった世界。それがアルブレヒト・デューラーという人の自画像でした。

私が留学していたのはエアランゲン・ニュルンベルク大学という、数学で有名な大学です。ナチスドイツで有名なニユルンベルクですが、デューラー記念館もあります。彼は、もとはハンガリー人です。そのデューラーの自画像はちょうど1500年、16世紀の始めに描かれました。16世紀というと、たぶん近代の始まりだと思えます。そして言うまでもなく宗教戦争の時代であり、今日で言うところの種的世界的な内戦状態、内乱状態、破壊と絶望、殺戮の時代だと思えます。そういう時代の中で彼は3度目の28歳の自画像を描いている。これを見た時、私は雷に打たれたような感じでした。

姿はイエス・キリストを模していると思いますが、けつしてシンメトリーではなく、少しずらしながら描かれています。そこには「私、アルブレヒト・デューラーは、このようにして、こんな色で、28

歳の時に私を描きました」と書いてあるんですね。それを見た時私が感じたのは、「私はここに立っている、おまえはどこに立っているんだ」という問いかけです。これは不思議な体験でした。私がデューラーを見ているにかかわらず、私が彼から問い詰められ、彼から見られているという感覚でした。

この時私は初めて、アートの力というものを感じました。自分がずっと迷っていた時代。29歳ですから、あの自画像を描いた時のデューラーより1歳上でした。彼は版画などもやっていました。中世のギルド社会に生きていましたから、言ってみれば技術屋さんです。一度マラリアか何かに罹り、ヨーロッパを徘徊して、イタリア、今のベルギーなども何年もかけて巡礼者のように回っています。その当時28歳というと、私たちの時代で言うところ、もう50を超えていたと言っているかもしれません。その、28歳のデューラーの眼差しがもの凄かった。そこで初めて私は、ある種自分が変わったような錯覚を持ちました。

### 不可解さを通して 自我が無くなりゆく体験

つまりアートの力というのは、一つには、未知との遭遇を通じて不可解なものに出会う、その不可解なものを通じて自分が変わるという体験だと思えます。今の私たちの世界では、分かりやすいことが求められます。分かりづらさというのは、ある意味では不快でもありますが、快であるものを求めていくことが私たちの社会の通性、法則になっています。分かりづらさというのはいやだ、不快である。不快感を催すものは見たくない。現に、「日曜美術館」は幸か不幸か、定評のあるものを取り扱う時には視聴率が上がります。そうでないものを扱うと、途中で1パーセントを切ってしまう。僕は視聴率はどうでもいいと思いますが、ディレクターはやはりNHKにいても気にするわけですね。

その中で一番不快というか不可解だったのはマーク・ロスコでした。作家の高村薫さんが新作を出版する際、ロスコの絵を本の表紙に使った。ロスコはロスコ

ヴィツチといって、ロシア生まれのユダヤ系の人です。70歳で自ら命を絶しました。そのロスコの絵を、撮影のため千葉県のある美術館で、誰もいないところでゆつくりと見させていただきました。

ロスコの絵は、ひとことで言うと抽象表現主義と言いましょか。抽象画というのは、日曜日の朝9時頃から、眠いなと思いがちチャネルを回して見ようという気力が湧かないんですね。それからモネとか印象派の、日本の人々が好きそうなものをゆつくり見たい。それに対して不可解で、場合によっては不快感を抱き、分らないのが抽象画です。

私がロスコの絵を見た時、分らないところ、立ち尽くしている自分というところ、これは個人的な感想ですが、やがて自分が溶け出していくという体験を持ちました。つまり、自我が無くなっている。自分が今、分かりづらさということ、自分という人間に何かしかがみつこうとしているからではないか。分らないということを通じて、やがて自分はずうっと溶け出していきました。溶け出していった時に、物凄くある種の快感のよ

うなものを味わうことができ、そしてその中に自分の懐かしい時代がぼんやりとイメージ化されてくる。自分が本当は最も楽しかったのは6歳か7歳だったのではないか、その時代がイメージとして湧いてくるんですね。表面的に見れば真っ黒の漆黒の闇のような抽象画ですが、そこに立っていることを通じて、やがて自分のすべてのかさぶたが取れて、本当に自分が帰りたい場所、帰りたい時代、帰りたい人々がイメージとして湧いてくる。これは本当に私にとっては、なかなかない機会でした。

つまり、分かりづらさ、不可解さ、ミステリアスということを通じて、私たちの想像力がかきたてられる。そこには、やはり既知数と未知数とのせめぎ合いがあり、やがて未知数の世界に自分をあずけた時に、自分というものは無くなってしまう。これは強い刺激ではないのですが、ある種のエクスタシーだと思います。そうすると自分の社会的地位とか、自分が武装しているいろいろな鎧が全部取れて、本当に、これは誤解を招きやすい表現かもしれませんが、無垢な自分が現れる。

自分はそんなにいい人間ではないと思っても、やはりそういうものがあるんだという感じが分かりました。

### アートは「強要」しない

彼は1970年、20世紀の後半に亡くなっています。最終的には自殺します。彼はこの時代には生きられなかつたのではないか。自分と世界とのハーモニーが根源的に崩れている、この時代。高村さんはそれを作品として描きたかつたのだと思います。私たちはどこかで、自分とそのアートとの、あるいは世界との何らかの調和があるという前提で、何かを築き、楽しむというわけですが、そもそも私たちが世界との関係は予定調和的でなくなっている。あるがままの世界を写すならば、それにはたぶん芸術性はないと思います。アーティストは、世界をどう見るのかを私たちに示してくれる。アーティストの最も個人的かつ内面的に秘められた世界を通じて、初めてパブリックな世界が見えてくる。そういうことを私たちは感じるわけです。

ですから、アートは私たちに押し付けません。アートはこのように解釈しろというコードを持っていません。学問も宗教も、ある意味においてコードを持っています。「汝、信じよ」——宗教であれば、これが前提です。あるいは真理を求める、あるいは社会的な公用性がある。そういう一つのコードの上に、ある解釈というものがある。一時的に成り立っていくわけですが、アートは一切それを強要しない。言ってみれば、完全にアナキーな状態です。

ですから、みんな迷うわけです。自由だと思っているつもりが、ほとんど不自由な世界の中に私たちは生きていますし、本当に自由を与えられてみると、もの凄く迷う、あるいは不安になる。場合によってはそこから逃れたいと思う。極限的にそういう一切の決まり事を無くして、それを強要しないということですね。こうしなさい、こう見なさいということ。アートを私たちに押し付けがましくしません。もしそれをしたとすれば、たぶんプロパガンダになると思います。一部のプロレタリア芸術がそれをやろうとし

て、おそらく作品としては残りませんでした。

## 生と死との狭間から アートが生まれる

私の番組で、この間はピカソをめぐる女性たちというのを収録しました。その中にフランソワーズ・ジローという女性がいました。ピカソにとつて6番目か7番目の女性ですが、今もニューヨークで活動しておられます。この人だけがピカソを捨てた。あとの女性はみんなピカソに魅入られ、離れることができなかった。その中の女性同士の確執が「ゲルニカ」につながっているのだと知った時は、目からウロコでした。私たちはあの絵を反戦平和、反ファシズムというふうに通り一遍に解釈しようとしています。したがってピカソは平和主義者だったと言いたがるわけです。ピカソのモチベーションの中には、確かにそれがあつたかもしれせん。しかし彼が描こうとした時にあつたのは、女性たちの争い、いさかいだった。それを知つたのは非常に新鮮な体験

でした。

私たちは、なぜアートに魅入られるのか。私はアートの中には、やはりエロスという問題があると思います。その時の番組に出演された解説者の方はピカソに4回くらい会っていますから、ピカソを日本で一番よく知っているのではと思います。その方の話を聞いていて意外だつたのは、ピカソは死ぬのが恐かつたといふんですね。確か91歳まで生きた北斎に影響を受けたピカソは、90歳前後という晩年にいたるまで、可能な限り生きようとした。ある種のドラキュラです。女性の生き血を吸つて、あくまでも創造力を保つ。現に女性たちは、2人は自殺、1人は確か精神病院か何かで亡くなつていふと思えます。エロスをピカソにあげた人は同時に魂を抜き取られ、最期はピカソ亡き後にそういう死に方をしているわけです。ピカソの場合は死に対する恐怖があり、それが逆に、もの凄性への渴望になつていった。それはやはりエロスなのではないかといふふうに解説されていきました。これもやはり、アートならではのものではないかと。

20世紀最大のアーティストであるピカソを衝き動かしていたものは、人間のものと深い部分にあるエロスにある、生と死の問題であることに気付いた時、ピカソに対する見方もちよつと変わつてきました。そのような発見は他の作品にもたくさんあります。私たちが魂が抜けるくらいに魅入られるのにはエロスや生と死の問題にかかわることがあるからだと、アートにはどこかできつちりと私たちに伝えてくれるものがある。それに反発する人もいるかもしれませんが。凄い違和感を抱く人もいるかもしれませんが。あるいは、そういう世界はいやだという人もいるかもしれません。

しかし一方で犬塚勉のように、エロスとはまったく反対のところへすべてのアートの源泉を置くような人もいます。つまりアートというのは、人間という、この謎に満ちた世界を描き出すと同時に、まったく対極にある自然というものに向かつていく。私たちが、人間の持ついろいろな謎めいたものにどうも飽きてしまつた時に、自然へ向かうという気持ちもよく分かります。エロスと逆方向



で、犬塚さんは自然と一体化することを通じてある種の永遠の生を得ようとしたのではないか。彼は山の中で遭難されたということになっているのですが、もしかしたらこれは意図せざる自死の行為ではなかったかと言う人もいます。でもや

つぱり、生と死という問題が出てくるのですね。

番組で1年ちよつとやってきて私が感じたことは、アートを生み出す創造力は絶望から始まるということです。幸せな人間はたぶん、アーティストにはなれない。なれたとしても、それはおそらく通俗的なもので終わるでしょう。先ほど紹介したフランソワーズ・ジローも、結局ピカソをあれだけ愛してピカソと復縁した時に、ピカソは別の女性と結婚した。

自分を捨てようとしたジローに対する、ある種のリベンジだったと思います。しかし彼女はその絶望の中で、初めて最高傑作を創りました。マニユアルもない、予定調和もない、人間が進退窮まった、限りなく死に近いところに追い込まれた時に生まれてくるアートの力は大変なものだと思えます。

村上隆という人が現代アートでなかなか有名です。どこかのブランドでもロゴマークが使われているかもしれません。彼が言っている中で非常に面白かったのが、「やった、これで出来た」と思った瞬間に、自分の脳がパカッと開いたよう

な気がする。自分の頭の中がパカッと開く。これはたぶん死に近いというふうには彼は言っていたんですね。私たちがなぜ感動するかということは、たぶんそのあたりに秘密があるのではないか。つまり「生」から「生」が生まれてくるのではなく、死や絶望に近いところから生まれてきたものが、限らない感動を呼び起こすということです。美術番組を持つた今、私はそう思います。

### リアリティ欠乏の時代にこそ 生と死の世界へ誘うアートを

結局、私たちの時代は——ますます私たちの時代はそうなっているのですが——死を忌み嫌い、死を遠ざけ、90歳であれ100歳であれ、生をできる限り延ばしたいと思っています。私の言葉で言うと、リアルなものから遠ざかりたい。これの行き着いた先が電脳社会なのかもしれない。おそらくそういう電脳社会的なものがリアルなものより、もつとリアリティを持つ。そういう中で、私が今勤めている情報学環でも、ビデオアート

やさまざまなコンピュータグラフィックを通じたアーティストはいっぱいます。と同時に、人間は生だけでなくで死という問題にもきちっと向き合う、死が無意味になれば生も無意味になると、ある学者も述べていますけれど、人間が不可逆的に背負い込んでいる死の問題を潜り抜けたところに初めて、アートの生産性、創造性、創造力がみなぎる作品と出合うのだということ、私はこれまでの番組を通じて、ずっと感じてまいりました。

「私はあまりたいしたことは言えませんが、しかしアートに魅入られると、私たちはいつの間にか、人間がいつもずっと考えざるを得ないような生と死という問題を考えようとしてしまいます。宗教、哲学、いろいろな学問など、あるコードを通じて

て何かを教え込んだり、あるいは私たちにこれ見よがしに押し付けているのではない。アートは一切我々に何かを押し付けるわけではありません。いまイギリスあたりでは経済が非常に落ち込んでいますが、若者が美術館に通うことが多くなつたと聞いています。日本でも、失業したり非正規雇用になつたりと、いろいろ迷っている人が、アート、美術に触れることを、もつともつとやるべきではないかと私は思います。

結局私たちの巷にあふれているのは、解答のあるものです。問いは必ず解答とセットになっていますが、解答のない問いを発するのは無駄であるということが、私たちの一般社会での通則になつているわけで、結局生と死という、ある意味で

解答のない問題をアートは引き受けてくれる。そこにおそらく、唯一無二のものがあるのではないか。それが経済とどうリンクするか、これはシンポジウムでもまた、いろいろな先生方がいらつしやいますので話が弾めばいいと思います。どうもありがとうございました。

(2010年5月15日、大学ライフリスク研究センター公開シンポジウムでの基調講演を編集し掲載。大学寒梅館ハーディーホール)

#### 略歴

姜尚中（かん さんじゅん）氏

早稲田大学大学院政治学研究所博士課程修了。旧ドイツ、エアランゲン大学に留学後、国際基督教大学などを経て、現在東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授。専攻は政治学、政治思想史。主な著書に「オリエンタリズムの行方―近代文明批判」「姜尚中の政治学入門」ほか。